Miyazaki Women's Junior College

今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（四）

田中司郎

はじめに

平成元年六月から七月にかけて、今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の翻刻作業を行う過程で三百五十余りの書き入れ、夥しいミセケチ、検討を要する校合が出てきた。この「書き入れ」や「ミセケチ」等を『宮崎女子短期大学紀要』第二十七号「今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集の書き入れ』（一）では、二〇オの途中まで、第二十八号（二）では、三七ウまで、第二十九号（三）では、三八オから六九のウまで考察した。今回（四）は、七〇オから一〇一のウまでを考察する。

七〇オ

○かはかりのおもひにたえてつれ○なくなをなからふるたまのおもうし（二二九　歌）

「つれ」と「なく」の間に欠字○が見られ○の右横に「も」の書き入れがある。九州大学所蔵本は「つれもなく」で今山本と一致、書本は「つれなくも」である。この歌は、資盛の後世を弔うのは自分一人だけの勤めに思われるという最中に詠まれたものである。一首の意は、これほどつらい思いに耐えて、なお平気で生き長らえているわが命がやりきれなく思われることだ、である。「たまのお」の「お」の右横に「を」の書き入れがある。九州大学所蔵本、書無彰刊竹群本は「たまのお」、架本は「玉のを」である。「を」の書き入れは、架本と同じである。『和字正濫鈔』巻三に「緒　を　年の緒玉の緒等」とある。『下官集』に「玉のを」、『假名文字遣』に「たまのを　玉緒命名也　琴ノヲモ同」とあり、今山本の「たまのお」表記のより所は見当たらない。なお「お」の消し方に二通りある。ミセケチの上にさらに消したあとがある。

○たにのかたにて見をろしたれは（二三〇　詞書）

「を」の左に二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を書き入れている。九大本も「見をろし」だが、書無刊竹架群本は書き入れと同じ「見おろし」である。『和字正濫鈔』巻三も「下風　おろし　萬葉」と記しているが、『假名文字遣』は、「み山をろし　山おろしの時はお也　山風」と記している。

『仮名遣と上代語』の「仮名遣の起源についての研究」資料に「山おろし」の資料がある。高松宮本古今和歌集一例、高松宮本後撰和歌集一例である。「山をろし」の例はない。

○ま○とにつちさへさけて（二三〇　詞書）

「ま」と「と」の間に欠字○があり、○の右横に「こ」の書き入れがある。九大本も「まとに」である。今山本、九大本の祖本は同

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

じと思われる。書無彰刊竹架群本は、書き入れと同じ「まことに」であり、意味の理解も、「まことに土までが暑さにさけて」と円滑に展開できる。

七一ウ

○ゆくゑなくわか身もさらはあくかれん（二三二　歌）

「ゆくゑ」の「く」に、二点のミセケチを施し、「く」の右横に「く」を書き入れている。確認のつもりで書き入れたと思われる。

七二ウ

○ふちはかまうちかほりひと村すゝきも実にむしのねしけき（二三三　詞書）

「実」に、二点のミセケチを施し、右横に「まこと」と書き入れている。「實（実）」のくずしが読みづらいことを配慮して書き入れたのかもしれない。そうであれば初学者を考慮して書き入れたと言える。九大本は「まとに」、書無彰刊竹架群は、「まことに」であるから、この七本の表記の影響も考えられる。

○つまとのもとにてたゝひとりなかむる○さま〳〵おもひ出ることなと（二三三　詞書）

「なかむる」と「さま」の間に欠字○があり。○の右横に「に」の書き入れがある。管見の写本はすべて欠字のない「なかむるに」である。用例箇所の意味は「妻戸のそばで、ただ一人物思いにふけってながめていると、いろいろ思い出すことなど」である。

○東のにはに柳さくらのをなしたけなるをませて（二三五　詞書）

「をなし」の「を」に、二点のミセケチを施し、「お」を書き入れている。「をなし」については、今山八幡宮『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（一）「をなし人の四月みあれの比」（六　詞書）の項で既に論じた。

七三ウ

○たゝをなしことをのみ（二三八　詞書）

「をなし」の「を」に、二点のミセケチを施し、「お」を書き入れている。「をなし」については、今山八幡宮『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（一）「をなし人の四月みあれの比」（六　詞書）項で既に論じた。

七四ウ

○秋ふかき山をろしちかき木すゑにひゝきあひてかけひの水のおとつれ鹿のこゑむしのねいつくものことなれとためしなきかなしさなり（二三九　詞書）

「山をろし」の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を書き入れている。

九大本、今山本の表記は、「山をろし」だが、書無刊竹架群本は、今山本の書き入れと同じ「山おろし」である。

藤原定家の自筆本である高松宮本古今和歌集に「山おろし」一例、高松宮本後撰和歌集に「山おろし」一例、近代秀歌に二例あり、書き入れに同じ「山おろし」である。

『和字正濫鈔』巻三も「下風　おろし　萬葉」と記しているが、『假名文字遣』は、「み山をろし　山おろしの時はお也　山颪」と記している。

「おとつれ」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を書き入れている。おとつれ」については、今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（一）「いつしか春のけしきもうらやましう鶯のおとつるゝにも」（六七　詞書）の項で既に論じた。

七六オ

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

○山ふかくとゝめおきつるわかこゝろ（二四一　歌）

「おきつる」の「お」に、二点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。今山本と九大本は同じ表記である。したがって祖本が同じと考えられる。書本は、「とゝめをきける」、彰本は、「とゝめをきつる」、刊本・群本は、「とゝめをきぬる」、竹本・架本は、「とめをきぬる」と異同が多い。

「とゝめおきて」については、今山八幡宮『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（一）「おはなかそてにとゝめおきて」（二二　歌）の項で既に論じた。

○なけきわひわかなからましとおもうまでの身そわれなからかなしかりける（二四二　歌）

「わかなからまし」の「わか」の文字上にミセケチを施し右横に小さく「いか」と書き入れ。九大本と今山本は一致している。彰本は「わかなからましと」が「なからましかは」とあって「ワカナカラマシ　イ本」とある。

「わかなからましと」は、書本では「我なからましと」、無本は、今山本の書き入れと同じ」いかなからましと」である。祖本をたどる上で留意しておきたい。彰刊竹架群本は「なからましかはと」とあり、異同が多い。

「おもうまでの」の「の」の右横に、「無イ」の書き入れがある。書本は、「思までの」竹架本は、「思ふまで」である。この歌は、写本異同が多い。「思い悩み、嘆き悲しんでいっそこの世を去りたいと思うまでの身となったのは、我ながら悲しい」の意である。

七六ウ

○みやこは春にへたゝりぬる心ちしてなにの思ひいてにかと心ほそし（二四五　詞書）

「春」に二点のミセケチを施して、「春」の右横に、「はるか」と書き入れている。

今山本の「春に」の箇所が、九大本は、「はるに」と平仮名書きである。無彰刊竹架群本は、書き入れと同じ「はるかに」である。この系統の写本を見て書き入れたのではなかろうか。書本は、「はるかと」とあり、管見では一本のみである。

七七ウ

○かりの一つらこのゐたるうへをすくるおとのするもまつあはれとのみきゝて（二四五　詞書）

「おと」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を小さく書き入れている。

「おと」については、今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（一）「うつおとにねさめの袖そぬれまさるころもはなにのゆへとしらねと」（二五　歌）の項で既に論じた。

○せきひとつこそこえぬるはいくほとなたをこすゑにひゝくあらしのおとも宮こよりはことのほかにはけしきに（二四六　詞書）

「いくほとなたを」の「た」に二点のミセケチを施し、「た」の右横に、小さく「らし」を書き入れている。この箇所は、諸本「いくほとならし」で、意味も通じないから書き入れ、訂正したと思われる。今山本書写の際の誤写であろう。

また、「おとも」の「お」に、二点のミセケチを施し、「を」を小さく書き入れている。「おと」については、今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（一）「うつおとにねさめの袖そぬれまさるころもはなにのゆへとしらねと」（二五　歌）の項で既に論じた。

七七ウ

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

○せきこえていく雲井までへたてねとみやこにはにぬ山をろしかな（二四六　歌）

「山をろし」の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を小さく書き入れている。

九大本、今山本の表記は、「山をろし」でこの二本のみ「山をろし」の表記である。

無刊竹架群本は、「山おろし」、書本は、「やまおろし」である。

藤原定家の自筆本である高松宮本古今和歌集に「山おろし」一例、高松宮本後撰和歌集に「山おろし」一例、近代秀歌に二例ある。書き入れに同じ「山おろし」である。

『和字正濫鈔』巻三も「下風　おろし　萬葉」と記しているが、『假名文字遣』は、「み山をろし　山おろしの時はお也　山風」と記している。

○つく〳〵とおこなひてたゝ一すちにみし人の後の世とのみいのらるゝにも猶かひなきことのみおもはしとても又いかゝはそともたち出てみれはたちはなの木に雪○ふかくかつもりたるをみるにもいへのとしとや（二四七　詞書）

「おこなひ」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を書き入れている。今山本と九大本の表記は同じ。祖本判定の資料となる。書無刊本は書き入れと同じ「をこなひて」。どの写本を書き入れの際使用したかがわかる。「おこなひ」について」は、今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（二）「せうとなりしほうしのことにたのみたりしか山なくおこなひてみやこへいてさりし比」（一一七　詞書）の項で既に論じた。

「いかゝは」の「は」の右横に「無イ」の書き入れが見られる。刊本は「いかゝ」である。今山本と九大本の表記は同じ。

「雪」の次に○があり、○の右横に「のイ」の書き入れがある。無彰刊竹架群本は、「雪のふかく」である。これらの写本を見て書き入れたと思われる。

「いへの」の「へ」に、二点のミセケチを施し、「へ」の右横に「つ」を書き入れている。意味上、明らかに誤写と見て書き入れたと思われる。他の写本は、「いつの」である。

七八オ

○わかたちならすかたの木なれは契なつかしくてといひしおり（二四七　詞書）

「おり」の「お」に二点のミセケチを施し「を」を書き入れている。今山本と九大本の表記は同じ。書無本は、書き入れと同じ「をり」である。「おり」については、は、今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（一）「おほゆることゝものあるをり〳〵ふと」（一　詞書）の項で既に考察した。

七八ウ

○風にしたかひてなるこのおとするもすそろに物かなし（二四九　詞書）

「おと」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を書き入れている。今山本と九大本の表記は同じ「おと」。書本は「をとのするにも」、無刊竹架群本は、「をとのするも」、彰本は「をとするも」で異同が多い。「おと」に関しては、今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（一）「うつおとにねさめの袖そぬれまさるころもはなにのゆへとしらねと」（二五　歌）の項で既に考察した。

「すそろ」の「そ」に、二点のミセケチを施し、「そ」の右横に

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

「す」を書き入れている。無彰刊竹群本は「すゝろに」、架本は、「こゝろに」である。今山本と九大本の表記は同じである。「すそろ」では意味は通じない。諸本も見て書き入れたと思われる。

○ありし世にあらすなるこのおときけはすきにしことそいとゝかなしき（二四九　歌）

「おと」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に、「を」を書き入れている。書無彰刊本は「をと」、竹架群本は、「音」である。今山本と九大本は同じ「おと」である。「おと」に関しては、今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（一）「うつおとにねさめの袖そぬれまさるころもはなにのゆへとしらねと」（二五　歌）の項で既に考察した。

七九オ

○我心うきたるまゝになかむれはいつくを雲のはてとしもなし（二五0　歌）

「なし」の「し」に、二点のミセケチを施し、「し」の右横に、「し」を書き入れている。九大本も諸本も取り上げていない。今山本は確認のつもりで書き入れたと思われる。

○十二月ついたちころなりしや○ん夜に入てあめとも雪ともなくうちゝりてむら雲さわかしくひとへにくもりはてぬ物からむら〳〵ほしうちきえしたり（二五一　詞書）

「なりしや」の次に○があり、欠字○の右横に「ら」の書き入れがある。書本は、「なりしやらむ」、無彰刊竹架群本は「なりしやらん」で、今山本の書き入れと同じである。今山本の書き入れは、「なりしやらん」の写本を見てから行われたのではなかろうか。九大本は、「なりしやん」で今山本と一致している。

「雲さわかしく」の「わ」に、二点のミセケチを施し、「わ」の右横に「は」を書き入れている。九大本も諸本もふれていない。

「うちきえしたり」の「え」をなぞったあとがあり、「え」の右横に「らイ」を書き入れている。彰本は、「たちきらしたり」である。今山本の書き入れは、この彰本とかかわりがあるように思われる。

七九ウ

○はれてあまき色なるにひかりことく〳〵しきおほきなるむらなくいてたるなのめならすおもしろくてはなのかみにはくをうちゝらしたるにようにたりこよひはしめてみすめたる心ちす（二五一　詞書）

「あまき」の「ま」に、二点のミセケチを施し、「ま」の右横に、「さ」を書き入れている。「あまき」の表記は、今山本のみである。誤写に気づいて書き入れたと思われる。「みすめたる」の「す」に、三点のミセケチを施し、「す」の右横に、「そ」を書き入れている。「みすめたる」も今山本のみである。誤写と見てミセケチを施し、「そ」を書き入れたと思われる。

○よもすからなかむるにかきくもり又はれのきひとかたならぬ雲のけしきにも（二五四　詞書）

「ひとかたならぬ」の「ひ」に、二点のミセケチを施し、「ひ」を書き入れている。確認のつもりで書き入れたと思われる。

○おほそらははれもくもりもさためなきを身のうきことはいつもかはらし（二五四　歌）

「かはらし」の「し」に二点のミセケチを施し、「し」の右横に、「し」を書き入れている。竹群本は「かはらぬ」、架本は「替ぬ」である。今山本、九大本は同じ表記である。

八一ウ

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

○そともの なるこのおとなひもさひしきそふ心ちしておほかたのよものこする（二五五　詞書）

「おとなひ」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に、「を」を記入している。書無彰刊竹架群本は、「をとなひ」である。『和字正濫鈔』巻三に、「響　おとなひ　日本紀」の記述がある。御物本更級日記（定家自筆本）に、「をとなひ」が二例ある。前田本定頼集（定家自筆本）に、「をとなふ」が一例ある。書き入れは、定家仮名遣い系統のものを見てなされたと思われる。

「さひしき」の「き」に、二点のミセケチを施し、「き」の右横に、「さ」を書き入れている。「さひしき」の表記は、今山本だけで、九大本も管見の写本も「さひしさ」である。

○こほりはむせひながらさすか心ほそきおとはたえ〳〵きこゆるに（二五六　詞書）

今山本と九大本は、同じ表記で「おと」であるが、書無彰刊竹架群本は、「をと」である。この「おと」については、今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（一）「うつおとにねさめの袖そぬれまさるころもはなにのゆへとしらねと」（二五　歌）の項で既に論じた。

○したにはたえぬ水のおとかな（二五六　歌）

今山本と九大本は、同じ表記で「おと」である。書無彰刊本は「をと」、竹架群本は「音」である。

この「おと」については、今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（一）「うつおとにねさめの袖そぬれまさるころもはなにのゆへとしらねと」（二五　歌）の項で既に論じた。

○また夜をこめて宮このうちへいへるみちはしかの浦なるに入江にこほりしつゝよをかくるなみのかへらぬ心ちして（二五七　詞書）

「いへる」の「へ」に二点のミセケチを施して、「へ」の右横に、「つ」を書き入れている。九大本、管見の写本は「いつる」である。誤写と見て「つ」を書き入れたと思われる。

「よをかくる」の「を」・「く」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に「せ」、「く」の右横に、「か」を書き入れている。書彰本は「よせかへる」、無刊本は、書き入れと同じ「よせかゝる」、竹架群本は「よせくる」で、異同が多い。

八二オ

○うす雪つもりてみわたしたれはしろたえなり（二五七　詞書）

「しろたえ」の「え」に二点のミセケチを施して、「え」の右横に「へ」を書き入れている。書無彰刊本は「しろたへ」、竹架群本は「白妙」である。

『下官集』に「しろたへ」、『假名文字遣』に、「しろたへ　白妙」がある。『和字正濫鈔』巻四に「妙　たへなり　白妙打妙等おなし」とある。今山本の「たえ」のより所は分からない。

○くろ〳〵とをそろしけにあれたるに（二五八　詞書）

「をそろしけに」の「を」に、二点のミセケチを施して、「を」の右横に「お」を書き入れている。書無彰刊竹架群本は、「おそろしけ」であるが、今山本と九大本は「をそろしけ」である。

御物本更級日記（定家自筆本）に、「おそろし」十四例、「おそろしげ」六例が見られる。『假名文字遣』に「おそろし　恐　懼」がある。書き入れは、定家仮名遣い系統の写本をより所にしたと思われる。

○雲路にこきゝゆるおふねのよそめになみ風の（二五八　詞書）

「おふね」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

「を」を書き入れている。今山本、九大本ともに表記は、「おふね」である。書無彰刊竹架群本は「をふね」である。

「おふね」については、今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』（一）「あしわけて心よせけるおふねともくれなゐふかきいろにてそしる（六０　歌）」の項で述べた。

八二ウ

○おもひのほかにきゝたらいいかにすみうきわたりなりともとゝまりこそせめなとさへあんせられて（二五八　詞書）

「きゝたらい」の「い」に、二点のミセケチを施し、「い」の右横に「は」を書き入れている。「きゝたらい」の表記は、今山本のみで、誤写と気づき訂正したと思われる。

「あんせられて」の「せ」に、二点のミセケチを施し、「せ」の右横に、「せ」を書き入れている。書き入れの表記は、今山本のみである。確認のつもりで書き入れたと思われる。

八三オ

○「月さし入てむめかほりつゝみんなり」（二五九　詞書）

「みん」の「み」に、二点のミセケチを施し、「みん」の右横に、「えん」を書き入れている。彰本は、「むめかほりつゝえんなりなかめあかして」はない。

八四オ

○「さそはれてまいりぬおこなひうちして（二六二　詞書）

「おこなひ」の「お」に、三点のミセケチを施して、「お」の右横に「を」を書き入れている。今山本と九大本は同じ「おこなひ」であるが、無本は、書き入れと同じ「をこなひ」、刊本は「をこない」である。

高松宮本後撰和歌集（定家自筆本）に、「をこなふ」一例、「をこなは」一例、「をこなひ」一例、高松宮本拾遺和歌集（定家自筆本）に、「をこなは（行）」一例、「をこなひ」二例、御物本更級日記（定家自筆本）に「をこない」六例、行阿の『假名文字遣』に「をこなふ　行」とあるので、書き入れは定家かな遣いに基づいていると思われる。

八四ウ

○世の中のつねなきことのためしとてそらかくれにし月にこそ有ける（二六二　歌）

「そら」の右横に、「くもイ」の書き入れがある。この書き入れは、九大本にも、管見の写本にも見られない。

○いむふく門院皇后宮と申し比（二六三　詞書）

「む」に、二点のミセケチを施し、「む」の右横に「ん」を書き入れている。無本は「いんふく門院の右に、殷富とあり」（『建禮門院右京大夫集　校本及び総索引』頭注）。書刊竹架群本は「殷富門院」。今山本と九大本は、同じ「いんふく門院」の表記である。

八五オ

○かへり給ぬる名残あめうちふりて物あわれなり（二六三　詞書）

「あわれなり」の「わ」に、二点のミセケチを施し、「わ」の右横に「は」を書き入れている。今山本の「あわれ」の箇所が、九大本では、今山本の書き入れと同じ「あはれ」である。管見の写本は「あはれ」である。『和字正濫鈔』巻四に「憐　あはれ」とある。「わ」の書き入れについては、七０の詞書、七八の詞書の項で述べた。

○ことに我おなしすちなる事をおもふ人なり○なつかしくもあり（二六三　詞書）

「おもふ人なり」と「なつかしくも」の間に欠字の○があり、○

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

の右横に「しかイ」の書き入れがある。書竹架群本は、「人なりしかは」、刊本は、「ひとなりしかは」である。今山本と九大本の表記は同じである。書竹架群刊本を見て書き入れたと思われる。「しか」があると、前後の語句の意味理解が円滑になる。無本は、「人なり」の右に「しかはイ」と校合がある。

八五ウ

○あはすなる浮世のはてにほとゝきすいかてなくねのかはらさるらん（二六六　歌）

「あはす」の「は」に、二点のミセケチを施し、「は」の右横に、「ら」を書き入れている。今山本と九大本は同じ「あはすなる」である。書無彰刊竹架群本は、「あらすなる」である。書き入れ箇所を含む上の句は、「なにもかも昔と違ったこの世の果て」という意味である。意味を考慮して書き入れたと思われる。

八六オ

○五月二日はむかしの母のき□也（二六七　詞書）

□の箇所は破れている。九大本は「日」である。「五月二日」から「又ぬれぬ」までの叙述は母の忌日を述べた箇所であることを考慮して書き入れたと思われる。

○又こむとしのいとなみはえせぬこともやとおもふにも（二六七　詞書）

「えせぬ」の「え」に、二点のミセケチを施し、「え」の右横に、「え」を書き入れている。「えせぬ」の写本異同はない。

八六ウ

○おもひいつへき人もなきかたえかたくかなしくて（二六八　詞書）

「たえ」の「え」に、二点のミセケチを施し、「え」の右横に、「へ」を書き入れている。「たえ」は、今山本、九大本同じである。無彰竹架群本は、「たへかたく」である。

『下官集』に「不堪　たへす」、『假名文字遣』に「たへたり　堪任忍イ」「うちたへて打堪」、『和字正濫鈔』に「堪　たへ　たふとはたらけり。公任をきんたふ、長能をなかたふ。堪任とも堪能つゝきて今のたふに同し」とある。「たえ」表記のより所は見当たらない。

八七オ

○ひこほしのあひみるけふはなにゆえにとりのわたらぬ水むすふらん（二八六　歌）

「なにゆえ」の「え」に、二点のミセケチを施し、「え」の右横に、「へ」を書き入れている。書無彰本は、書き入れと同じ「なにゆへ」、刊竹架群本は「何ゆへ」である。

この「ゆえ」については、八九の歌の項で考察した。すなわち、「へ」の書き入れは、定家仮名遣い系統のものを見て書き入れたと思われること、「たえ」表記のより所が見当たらないことである。

八七ウ

○たなはたにけふやかすらん野辺ことにみたれおるなるむしのころもゝ（二八八　歌）

「みたれおる」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に、「を」を書き入れている。無彰刊群本は、書き入れと同じ「みたれをる」、架本のみ、「乱おる」。今山本と九大本は同じ「みたれおる」。

「おる」については三の詞書、一一四の詞書の項で考察した。すなわち、「を」の書き入れは、定家仮名遣い系統のものを見てなされたと思われるが、『和字正濫鈔』は「織　おる　日本紀萬葉和名等。世にをると書は誤なり」と記していること等である。

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

○何事をまつかたならむひこほしのあまのかはらにいはまくらして（二九〇　歌）

「ならむ」の「な」に、二点のミセケチを施し、「な」の右横に、「る」を書き入れている。九大本は、書き入れと同じ「まつかたるらむ」である。無彰刊竹架群本は「かたるらん」である。

「何事をまつかたならむ」では、意味が通じない。他の写本を見て、訂正したと思われる。

八八オ

○露けさは秋の野辺にもまさるらしたちわかれゆくあま○はころも（三〇四　歌）

「まさるらし」の「し」に、二点のミセケチを施し、「し」の右横に「し」を書き入れている。確認のため書き入れたと思われる。九大本も、他の写本も「まさるらし」で異同はない。

「あま」と「はころも」の間に、欠字○を記し、欠字の右横に、「の」を書き入れている。九大本も、他の写本も「あまのはころも」であるから、今山本の誤写と見て書き入れたと思われる。

○七夕に心はかしてなけくともかゝるおもひをえしもかたらぬ（三〇八　歌）

「なけく」の「く」の右横に、「けイ」の書き入れが見られる。刊本は、「なけく」の箇所を「なけけ」、竹架本は「なけく」の箇所を「歎け」と書写している。

「なけくとも」の場合、逆接の仮定条件が成立し、「なけけとも」逆接の確定条件が成立する。

八九ウ

○世中はみしにもあらすなりぬるにおもかはりせぬほしあひのそら（三〇九　歌）

「おもかはりせぬ」の「せ」に、二点のミセケチを施し、「せ」の右横に、「せ」を書き入れている。

九大本も今山本も同じ「おもかはりせぬ」の表記である。管見の写本も「おもかはりせぬ」である。書き入れは、確認のためと思われる。

○かたはかりかきてたむ□□うたかたをふたつのほしのいか□□□らん（三一三　歌）

「かたはかり」の「た」に、二点のミセケチを施し、「た」の右横に「く」を書き入れている。無刊架群本は、「かくはかり」で、書き入れと同じである。なお、前の□□を九大本で補うと「くる」、後の□□□を九大本で補うと「ゝみる」である。

○なにとなく夜半の□□れに袖ぬれてなかめそかぬるほし□□のそら（三一四　歌）

前の□□を九大本で補うと「あは」、後の□□を九大本で補うと「あひ」である。

九〇ウ

○わかゝりし起より（三二二　詞書）

「起」に二点のミセケチを施し、「起」の右横に、「ほと」を書き入れている。今山本の「起」は、九大本では「程」、彰本では「ころ」である。九大本との関わりが考えられる。

九一ウ

○みしりてなれむつれおゝはたらかしなとせしにいとようおほえたにもすゝろにあはれなり（三二四　詞書）

「おゝ」の「ゝ」の右横に、「を」を書き入れている。確認のつもりで書き入れたと思われる。

「おほえたにも」の「た」と「に」の間に、挿入記号と「るイ」

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

の書き入れがある。

「おゝ」は、今山本、九大本一致しているが、彰刊竹架本は、「おを」、群本は「尾を」で一致している。『和字正濫鈔』巻三に「尾　を　萬葉和名等。おと書へからす。萬葉にてをはのをに常にかけり」

「おほえたにも」の箇所を、彰本は、「おほえたるにも」、刊竹架群本は、おほえたるみるも」とかなり異同がある。「おほえたにも」では、円滑に解釈できない。

九二オ

○その世の事みし人しりたるもおのつからありもやすらめとかたらふよしもなしたゝ心の中はかりおもひつゝけらるゝかはるゝかたなくかなしくて（三二五　詞書）

「おのつから」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に、「を」を書き入れている。九大本も表記は「おのつから」である。無彰刊竹架群本は、「をのつから」である。「おのつから」については、四三の歌と二〇四の歌の項で述べた。すなわち、藤原定家仮名遣い実例をみると、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたのではないかということである。

『和字正濫鈔』巻三に「自　おのつから　おのれつからなれば准己」とあり、今山本の表記と一致する。

「なし」の「し」に、二点のミセケチを施し、「し」の右横に、「し」を書き入れている。今山本と九大本は一致している。

○五月五日さうふのみこしたてたるみはしのあたりの木のけしきもみしにも（三二六　詞書）

「木のけしき」の「木」に二点のミセケチを施し、「木」の右横に、平仮名「き」を書き入れている。

九大本、管見の写本は「木のけしき」で異同はない。今山本の書き入れはなんらかの確認の意図で書き入れたと思われる。

九三ウ

○つきもせぬうきねは袖にかけながらよそのなみたをおもひやる哉（三三〇　歌）

「つきもせぬ」の「せ」に、二点のミセケチを施し、「せ」の右横に、平仮名で「せ」を書き入れている。

九大本、管見の写本は「つきもせぬ」で異同はない。今山本の書き入れはなんらかの確認の意図で書き入れたと思われる。

○かけなからうきねにつけておもひやれあやめもしらすくらすこゝろを（三三一　歌）

「かけなから」の「から」の右横に、「るゝイ」の書き入れがある。九大本は、「かけなにゝ」である。

竹架本は、書き入れと同じ「かけなるゝ」である。今山本の書き入れは、この系統の写本と関わりがあると思われる。

無刊群本は、「かけなから」、彰本は「かけふるゝ」である。

○返しうすにひのうすやうに（三三三　詞書）

「うすにひの」の「う」の右横に「無」の書き入れが見られ、「やうに」の「に」の右横に、「イ」の書き入れがある。

九大本に、「うすにひのうすやうに」はない。無本は、「返し」のみである。

刊竹架群本は、「返しうすにひのうすやうに」である。この箇所の転写状態から、今山本は、この系統の写本を転写したとみることはできないだろうか。

九四ウ

○ちかくみし人にてあわれなれは（三三四　詞書）

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

「あわれなれは」の「わ」に、二点のミセケチを施し、「わ」の右横に、「は」を書き入れている。

九大本は、書き入れと同じ「あはれなれ」である。管見の写本も、「あはれなれ」である。

集中に「あわれにて」（七　詞書）、「あわれに」（一九二　詞書）、（二一〇　詞書）「あわれなれ」（一一五　詞書）、（三三四詞書）の五例が見られる。いずれも詞書に見られることも留意したい。

『下官集』に、「あはれひみ」があることを、七の詞書ですでに述べた。『和字正濫鈔』巻四に「何憐　あはれ」とある。「あわれに」の「わ」表記のより所はわからない。

九五オ

○またもこん秋のくれをはをしましなかへらぬみちのわかれたにこそ（三三九　歌）

「をしまし」の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に、「お」を書き入れている。九大本も今山本と同じ「をしまし」である。

無彰刊竹架群本は、書き入れと同じ「おしまし」である。書き入れは、この系統の写本を見て行ったものと思われる。

集中、八八の歌に「をしむ」がある。

『下官集』は「おしむ」、高松宮本古今和歌集（定家自筆本）に、「於しむ」四例、「於しみ」三例、「於しめ」一例、「をゝしま（を惜しま）」一例、「をゝしみ（を惜しみ）三例、高松宮本後撰和歌集（定家自筆本）に、「於しま（惜）」一例、「於しめ」一例高松宮本拾遺和歌集（定家自筆本）に、「於しむ」五例、「於しま」一例、「於しみ」五例、伊勢物語（天福二年本、定家自筆）に、「於しま」一例、「於しみ」一例、「於しめ」一例、御物本更級日記（定家自筆本）に、「於しむ」一例、前田家本定頼集（定家自筆本）に、「於しむ」一例、「於しみ」一例が見られる。

したがって、「お」は、定家仮名遣いに基づいて書き入れたと思われる。

しかし、『和字正濫鈔』巻三に「惜　をしむ　日本紀萬葉。おしむと書へからす。池にすむ名をゝし鳥とつゝけたるはかなよく叶へり」とある。

○ちかなか（無イ）（三四〇　詞書）

「ち」の右横に「無」、「か」の右横に「イ」を書き入れている。

九大本の「ちかなか」と今山本は一致している。書無本に「ちかなか」はない。彰本は「ちかなか平親長」、竹架群本は、「親長」である。

九五ウ

○板ひさし時雨はかりはおとつれて（三四〇　歌）

「おとつれて」の「お」に、二点のミセケチを施して、「お」の右横に、「を」を書き入れている。

九大本と今山本は「おとつれて」で一致している。

書無彰刊本は、書き入れと同じ「をとつれて」、竹架群本は、「音つれて」である。

集中、「おとつれ」の「お」に右横に、「を」を書き入れたもの、詞書（九三、一二二、一五九、一六二、二三九）五例、歌（三四〇）一例で詞書に多い。

藤原定家の仮名遣い実例「をとつれ」を見ると、高松宮本古今和歌集四例、高松宮本後撰和歌集七例、高松宮本拾遺和歌集四例、伊勢物語（天福二年本、定家筆）三例、御物本更級日記（定家自筆本）二例である。

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

『假名文字遣』にも「をとつれ　音信　音（ヲトツレ）」がある。したがって、書き入れは、藤原定家の仮名遣いに基づいて書き入れたものと思われる。

○植おきしぬしはかれつゝ（三四一　歌）

「植おき」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に、「を」を書き入れている。九大本も「（うへ）おき」である。書彰刊本は、書き入れと同じ「うへをきし」、無本も「植をきし」である。竹架群本は、「うへ置きし」である。

集中、「ととめおき」（二二一　歌）、（二四一　歌）、「たのめおき」（二九　歌）、「おきわたり」（一七一　詞書）、「いひおき」（二〇〇詞書）、「かきおく」（六三　歌）、「かきおく」（六九　歌）、「うつしおく」（二二七　歌）等、かなりの用例があり、すべて「を」の書き入れがある。

『下官集』に「草木をうへをく」がある。藤原定家の仮名遣い実例である、高松宮本古今和歌集に、「をき」「をか」「をく」「をけ」三四例、高松宮本後撰和歌集に、「をか」「をき」「をけ」六九例、高松宮本拾遺和歌集に、「をく」「をか」「をき」「をけ」三五例、伊勢物語（天福二年本、定家筆）に「をく」「をき」八例、御物本更級日記（定家自筆本）に、「をく」六例、前田家本定頼集（定家自筆本）に、「をく」「をき」「をけ」六例がある。

行阿の『仮名文字遣』に、「をく露　置露　露をきてとも」とある。書き入れは、定家仮名遣いに基づいてなされたと思われる。『和字正濫鈔』巻三に「置　おく　日本紀萬葉和名。をくと書へからず」と記してある。

○秋のにははらはぬやとにあとたえてこけのみふかくなるそかなしき

三四二の歌と三四三の歌との間に書き入れがある。「か」「し」にミセケチがない。「秋」に、二点のミセケチ、「か」「し」を除くかなに一点のミセケチがある。

この書き入れは、九大本にない。書無彰本にもない。

群本に「秋の庭はらはぬ宿に跡絶て苔のみふかくなるそかなしき」とある。刊架竹本にもある。

○おもふらむよはのなけき（三四五　歌）

「よはの」の「は」に、三点のミセケチを施し、「は」に右横に、「そ」を書き入れている。九大本も今山本と同じ「よはの」であるが、書彰刊架群本は書き入れと同じ「よその」である。「よはのなげき」と「よそのなげき」とでは意味の理解に大きな相違がある。

九六ウ

○うちあけたるけしき（三四七　詞書）

「け」の右横に「ん」、「た」の右横に「し」、「る」の右横に「イ」の書き入れがある。九大本も今山本と同じ「うちあけたる」である。刊竹架群本は、書き入れと同じ「うちあんしたる」、書本のみ「うちあむしたる」である。意味の上で、本文と、書き入れに大きな相違はない。

○返しこれもものゝはしに（三四八　詞書）　九大本と無本に「これもものゝはしに」はない。書彰竹架群本は「返しこれも物のはしに」、刊本は「返しこれもものゝはしに」で今山本と一致する。

九七オ

○たちさらてよるひる（三四九　詞書）

「たちさらて」の「た」に二点のミセケチを施し、「た」に右横に、「た」を書き入れている。確認のつもりで書き入れたと思われる。九大本、管見の写本も今山本と同じ。

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

九七ウ

○おひつけとてはしらかす（三四九　詞書）

「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を書き入れている。無刊本は書き入れと同じ「おひつけとて」、書本は「をひつけと」、竹架群本は「をいつけとて」と小さな異同が見られる。

集中、二例（「おひつけとて」三四九　詞書）、「おいけれ」三五0詞書）見られる。伊勢物語（天福二年本、定家自筆）に、「をひ（追）」二例、「をい（追）」三例、御物本更級日記（定家自筆本）に「をふ」二例が見られる。『假名文字遣』に「をひかせ　逐風　追風」「をふ　をひとも　追　逐」とある。書き入れは定家仮名遣い系統の写本に基づいて行ったと思われる。『和字正濫鈔』巻三に「追おふ　萬葉和名。をふと書へからす」とある。今山本は、「おひ」と書写している。

九七ウ

○おきの葉にあらぬ身なれはおともせてみるをも見ぬとおもふなるへし（三四九　歌）

「葉」に、二点のミセケチを施し、「葉」の右横に、「葉」を書き入れている。確認のつもりで書き入れたと思われる。

「お」「せ」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」、「せ」の右横に「せ」を書き入れている。「せ」の書き入れは確認の作業と思われる。

「おと」は、九大本、今山本ともに「おと」である。「おと」の書き入れについては、二五の歌を始め、多くの用例箇所ですでに述べた。

九八オ

○さしおきてかへりけるに（三五0　詞書）

「さしおきて」の「お」に、二点のミセケチを施して、「お」の右横に「を」を書き入れている。このことについては、三四一の歌の項で述べた。

書無彰刊竹架群本は、書き入れと同じ「さしをきて」である。

○南のもんまでおいけれと（三五0　詞書）

「お」「い」ともに、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」、「い」の右横に「ひ」を書き入れている。「おい」の書き入れ「をひ」については、三四九の詞書で述べた。

○とよのあかりのせちゑの夜さへ（三五0　詞書）

「さへ」の「へ」に、二点のミセケチを施し、「へ」の右横に、「え」を書き入れている。今山本と九大本は、同じ「夜さへ」である。書刊群本は、書き入れと同じ、「夜さえ」である。集中二例（「人さへ」一二八　歌、「夜さへ」三五0　詞書）ある。いずれも「え」の書き入れがしてある。『下官集』に「風さえ」、『假名文字遣』に「けふさへあすさへ　今日副　明日副」、『和字正濫鈔』に「副萬葉　さへ　詞なり。萬葉に并兼共等の字をも同しく用たり。後撰にけふそへにくれざらめやはと思へともとよめる哥も、今日さへになり。此外そへとよめるは見えす」とある。

『下官集』と書刊群本は、書き入れと同じ「夜さえ」である。

○あわれさあえなくて（三五0　詞書）

「あえ」の「え」に、二点のミセケチを施し、「え」の右横に、「へ」を書き入れている。無刊竹架群本は、書き入れと同じ「あへなくて」である。「あえなく」は、集中一例である。『下官集』に「あへぬ」、『假名文字遣』に「あへて　敢」、『和字正濫鈔』巻四に「敢　あへて　あへぬも不敢なり」とあり、すべて「あへ」であり、

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

今山本の書写のよりどころは見当たらない。

九九ウ

○おいのなみ八千代をかけて君につかえん（三五四　歌）

「おい」に、二点のミセケチを施し、「おい」の右横に、漢字の「老」を書き入れている。無竹架群本は、書き入れと同じ「老のなみ」、書本は「おひのなみ」、刊本は「おひなみの」と異同が見られる。

「つかえん」の「え」に二点のミセケチを施し、「え」の右横に「へ」を書き入れている。今山本と九大本は、「つかえん」で同じ表記である。彰刊群本は、書き入れと同じ「つかへん」、竹架本は、「よつかん」である。

集中、「つかえん」は一例（三五四　歌）で、『假名文字遣』に、「みやつかへ　宮仕」「つかへ　仕」がある。『和字正濫鈔』に「使つかひ　つかふといふ用の言を躰にいひなすなり。」とある。

九九オ

○すこしよかりぬへく心のうちにおほえしかともそのままにおくへき事なれはおきてしを（三五五　詞書）

「よかりぬへく」の「く」の右横に、「きとイ」の書き入れがある。

書本は「よかりぬへき」、刊竹架群本は「よからんと」である。この二系統の写本を見て書き入れたと思われる。

「おきて」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に、「を」を書き入れている。「おきて」の意味は、「糸で縫う、刺繍して、の意である。『和字正濫鈔』巻三に「息　おき　いきなり。意の字於に用たるを思ふにいとお通するやうあるへし」とある。表記の面からの考察は、二二の歌から多くの箇所で行った。

九九ウ

○文字二おきなをして（三五五　詞書）

「おきなをして」の「お」に、二点のミセケチを施して、「お」の右横に、「を」を書き入れている。同じ語構成の複合動詞の用例に「おきわたり」（一七一　詞書）がある。「おき」にミセケチを施し、「を」を書き入れた用例の考察は、二二の歌を始め、多くの箇所で行った。すなわち藤原定家の仮名遣いに基づいて書き入れたと思われること、しかし、『和字正濫鈔』では「置　おく　日本紀萬葉和名。をくと書へからず」とあることを述べた。

○人めいかはかりみくなしくと（三五六　詞書）

「みくなしく」の「な」に、二点のミセケチを施し、「な」の右横に、「る」を書き入れている。今山本のみの表記である。「みくなしく」では、文意が理解できないので訂正したと思われる。

一〇〇オ

○返事に（三五八　詞書）

「事」に二点のミセケチを施し、「事」の右横に、「し」を書き入れている。書本は「かへりこと」、無刊竹架群本は、「返し」である。今山本も九大本も表記は「返事」である。

一〇〇ウ

○返し　民部卿定家（三五九　詞書）

刊本は「みむふきやうさたいゑ」、竹架群本は、「民部卿定家」である。九大本は、「定家」がない。

○をなしくは心とめける（三五九　歌）

「をなしくは」の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に、「お」を書き入れている。九大本も今山本と同じ「をなしくは」である。「をなし」については、詞書（六、五七、八七、一四

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

三、一九六、一九八、二一四、二二四、二三五、二三八）、歌（二一七）の項でそれぞれ述べた。

書刊架本は「おなしく」である。

○嬉しくおほえし　（三五九の歌のあと）

「し」の書き入れは、管見では今山本のみである

おわりに

今回は七０のオから一０一のオまで考察した。

1　ミセケチが施されている箇所は、詞書九九、歌三一で、合計一三０である。

ミセケチの語例は次の通りである。

おと　七例／をなし　三例／おとつれ　二例／あわれなれ（物あわれ　を含む）／山　をろし　二例／とめおき（植おきし・さしおき・そのままにおく　を含む）一例）　おこなひ　二例以下一例。たまのお／そらかくれ／見をろす／いむふく／ゆくゑ／実に／たえかたくなにゆえに／しろたえ／みたれおる／おとなひ／おのつから／いかなから／をしまし／いかゝは春に／おひつけ／もんまでおいけれ／いくほとなたを／いへの／夜さへ／おり／あえなくて／すそろに／おいのなみ／なし／まさるらし／かはらし／よしもなし／さわかしく／うちきえ／あまき／みすめたる／ひとかたならぬ／さひしき／いへる／よをかくる／をそろしけに／おふね

2　欠字（脱字）

つれ○なく／ま○とに／なかむる○／雪○ふかく／なりしや○ん／ひとなり○○なつかしく／母の○也／あま○はころも

3　損傷

かきてたむ○○○うたかた／いか○○○らん／夜半の○○れに／ほし○○のそら

4　ミセケチ箇所の表記が、九州大学図書館所蔵本と今山八幡宮所蔵本と一致するものが五九であるので共通する祖本の存在が考えられる。

5　書き入れが『下官集』と一致するもの、九例、『仮名文字遣』と一致するもの一二、定家仮名遣実例と一致するもの一五例、『和字正濫鈔』と一致するもの一０例、今山本のみの書き入れ一四例で入念な検討を要すると思う。

6　三四九の詞書「おひつけとて」の「お」の右横に「を」の書き入れがあり、三五０の詞書「南の門までおいけれ」の「お」の右横には「を」の書き入れがる。「おい」の「い」はイ音便と考えられる。

『仮名文字遣』に「をひ風」「をふ　追」、定家自筆本伊勢物語に「をひ（追）、をい　（追）」、更級日記に「をふ（追）」が見られるので、この系統の写本を見て書き入れたと思われる。

主な使用文献

○宮崎女子短期大学紀要　第十六号抜刷（一九九０）

○井狩正司編著『建礼門院右京大夫集　校本及び総索引』（笠間書院　一九九七）

○大野晋『仮名遣と上代語』（岩波書店　一九八二）

○福井久蔵編著『国語学大系　仮名遣一』第六巻　国書刊行会　一九八一）

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

○渡辺真理子「学生レポート」今山神社蔵『建礼門院右京大夫集』について（『解釈』　二〇二号　一九七二）
○福島直恭「定家仮名遣の社会的意義」（『国語学』一六六　武蔵野書院　一九九一）
○柳田征司『論集　日本語研究　中世語』（有精堂　一九八〇）
○久松潜一　松田武夫　關根慶子　青木生子校注『平安鎌倉私家集』（岩波書店　一九　六七）
○久保田淳　校注・訳『建礼門院右京大夫集　とはずがたり』（小学館　一九九九）
○石川泰水・谷　知子著『式子内親王集・建礼門院右京大夫集・俊成卿女集・艶詞』（明治書院　二〇〇一）
○今井卓爾監修『建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』（勉誠社　一九九〇）
○本井田重美評注『建礼門院右京大夫集』（武蔵野書院　一九八八）
○久曾神昇『昭和美術館　伝津守国夏筆　建礼門院右京大夫集と研究』（ひたく書房　一　九八二）
○村井順著『建礼門院右京大夫集評解』（有精堂　一九八八）
○糸賀きみ江校注『建礼門院右京大夫集』（新潮社　一九八七）
○草部了円著『世尊寺伊行女　右京大夫集』（笠間書院　一九七八）
○建礼門院右京大夫集　内閣文庫所蔵本影印複製
○建礼門院右京大夫集　書陵部所蔵本影印複製
○建礼門院右京大夫集　神宮文庫所蔵本影印複製
○建礼門院右京大夫集　岡山大学図書館所蔵本影印複製
○建礼門院右京大夫集　北海道大学所蔵本影印複製
○建礼門院右京大夫集　群馬大学図書館所蔵本影印複製

NII-Electronic Library Service